法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-05

「黒岩大」とは誰なのか : 「涙香伝」のために

OKU, Takenori / 奥, 武則

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences
(巻 / Volume)
60
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
71
(終了ページ / End Page)
95
(発行年 / Year)
2014-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021170

「黒岩 大」とは誰なのか

――「涙香伝」のために――

奥　　武　則

はじめに――本稿の課題

黒岩涙香

黒岩涙香については，すでに多くの伝記類が書かれている[1]。私自身，近代日本のメディア史を人物によってたどるという入門的書物に彼の小伝を寄稿したことがある[2]。その冒頭で，彼の生涯を次のように記した。

> 黒岩涙香〔くろいわ・るいこう〕1862年９月29日，土佐・安芸郡川北村（現・高知県安芸市）に生まれる。本名は周六。92年，『萬朝報』を創刊。「相馬家毒殺騒動」「蓄妾の実例」などセンセーショナルな報道で部数を拡大した。外国小説の翻訳・翻案で人気を博し，「巌窟王」（デュマ「モンテ・クリスト伯」）など膨大な作品を残した。社会改良運動を行う「理想団」を作る一方，「連珠」（五目並べ）を普及させるなど多彩な趣味人でもあった。1920年10月６日，死去。

わずか200字ほどだが，これだけでも涙香の多彩な仕事ぶりが分かるだろう。「多彩」ないしは「多才」は，黒岩涙香その人を語るときの欠かせないキーワードである。だが，いうまでもなく「多彩」「多才」という指摘は，何も対象について語っていないに等しい。涙香の「多彩」「多才」

の内実は何なのか。

涙香に関して書かれたまとまった文章として，おそらくもっとも最近のものと思われるものに，原田敬一による短い評伝がある[3]。「社会を刺激した奇才」というサブタイトルを付けた文章で，各章のタイトルでいえば，原因は「ジャーナリスト涙香」「文学者涙香」「哲学者涙香」「社会活動家涙香」と書き進み，最後の章を「黒岩涙香とは誰なのか」で結んでいる。涙香の「多彩」「多才」の内実を４つの側面で示したものと言っていい。

私は先に記した小伝の以前にも『萬朝報』のスキャンダル報道を素材に小さな本を書いている[4]。その本は直接，涙香本人を対象にしたものではなかったが，原田の「整理」にしたがえば，涙香の「ジャーナリスト」としての面にかかわるものだった。その後も涙香や『萬朝報』について短い文章を書く機会が何度かあった[5]。したがって，私としては「ジャーナリスト」としての涙香についてはそれなり付き合ってきたつもりである。しかし，その他の「文学者」「哲学者」「社会活動家」としての涙香に関してはごく表面的な知識しかなかった。先に記した小伝執筆に際しても，「ジャーナリスト涙香」以外の部分は，つまるところ「多彩」「多才」と表現するレベルで終わってしまった。

先にふれた原田による短い評伝は，最後に「黒岩涙香とは誰なのか」と題した章で結ばれている。つまり，ジャーナリスト・文学者・哲学者・社会活動家――と列記してみても，どうにも涙香の全体像を捉えきれないという筆者の思いが，そこに込められているのだろう。「ジャーナリスト」「文学者」「哲学者」「社会活動家」は，涙香のそれぞれの活動の側面に注目した枠組みである。当たり前のことだが，涙香その人は一個の人間である。包括的な評伝を著すとしたら，その人間を全体として捉える視点が不可欠だろう。

とはいえ，「大口」をたたきつつ，いまの私にはその用意はまだ十分にない。その準備作業として，本稿では『萬朝報』創刊以前の涙香の生涯をたどりつつ，彼が「多彩」「多才」を発揮するに至る前提には，自らを高みにおいて「黒岩大」を名乗った「政治青年」の内部にある種の回心があったことを明らかにしたい。

1　誇り高き郷士

涙香黒岩周六は父黒岩市郎（「一郎」の表記もある）と母信子の次男として生まれ，父の弟黒岩直方の長男として入籍された。生家は郷士の家柄だった[6]。生まれた土佐・安芸郡川北村（現・高知県安芸市）は，高知城下から海岸線を東に40キロほど行ったところに位置する農村である。

土佐藩の郷士と言えば，坂本龍馬の出自を思い浮かべる人が少なくないかもしれない。日本人の坂本龍馬像を決定したとも言っていい司馬遼太郎『竜馬がゆく』をはじめ多くの「龍馬伝」が必ずふれているように，土佐藩において上士と下士の間の身分差別がとりわけ厳しかった。上士から差別されていた下士にはさらに細分化された身分があったが，その上層が郷士である。しかし，同じ「郷士の家柄」といっても，坂本家と黒岩家では実はまったく状況は違うことに注意したい[7]。

18世紀後半の一時期，土佐藩では困窮した郷士らを救済する目的で，富裕な商人を選び，金銭によって郷士株を譲り受ける資格を与えた。坂本龍馬の本家は，代々繁栄した商家・才谷屋で，6代目当主がこのとき，郷士株を得た。商家は次男が引き継ぎ，長男が郷士坂本家を創設した。これが龍馬の曽祖父に当たる。こうしたかたちで郷士となった人々は「町人郷士」ないしは「譲受け郷士」と呼ばれた。金銭によって「身分」を得たという意味では，「成り上がり郷士」と言えないこともない。

一方，黒岩家は「成り上がり郷士」に対して「誇り高き郷士」の家柄と言えるだろう。黒岩家の先祖は，黒岩越前とされる。黒岩越前は戦国末期の土佐を彩る武人としてその事績が語り伝えられている。以下，『黒岩涙香』[8]（涙香会編，扶桑社，1922年）所収の前田耕作「祖先親戚及び少年時代」によって，その事績を記す。前田は『萬朝報』に長く勤め，涙香の秘書的な仕事をしていた人物という。

戦国期，土佐では，津野，長宗我部，大平，吉良，山田，本山，安芸の7人の守護職がしのぎを削っていた。勢力を強めていたのは長宗我部元親である。元親に最後まで抵抗したのが安芸国虎であった。黒岩越前は国虎に仕える二人の家老の一人だった。

1569年，土佐一円支配を進める長宗我部元親に対して安芸国虎は戦いを挑む。しかし，長宗我部勢は兵力に勝り，国虎陣営から内通者が出たこともあって，城は落城し，国虎は自刃する。黒岩越前は主君自刃の後，単身長宗我部軍に赴き，亡主の妻子を里方に送ることを乞い，無事に送り届けることができた。その帰路，越前は凱旋する元親に会う。元親は越前に自身への仕官を勧めたが，越前は「主君の7日の法要を済ませてから参ります」と丁重に答えたのみだった。亡主の法要を終えた越前は墓前で自害した。

これによって長宗我部元親は土佐一円を支配し，さらに四国全域に覇を唱えることになる。その後，長宗我部氏は豊臣秀吉との争いに抗せず，土佐一国に押し込められはするものの1600年の関ヶ原の戦いまで，30年にわたり，その支配を続けた。長宗我部は支配に際して，亡主の仇を狙いかねない安芸家の旧臣たちに土地を与えて農業に従事させた。関ヶ原の戦いの後，長宗我部に代わって土佐を支配した山内家は安芸家旧臣を含む長宗我部氏旧家臣らを懐柔する意味をあって，郷士にした。黒岩越前の子孫はもっとも早い時期に郷士に取り立てられ，「百人衆」と呼ばれることになる。

安芸市黒島の浄貞寺に安芸国虎の墓所がある。国虎の墓碑の両脇に主君に殉じた黒岩越前と有沢石見（もう一人の家老）の墓碑が建っているという。前田耕作は「共に浄貞寺境内に備後守（国虎）の墓を擁して今尚千古の忠節を旌（はた）して居る」[9]と記している。

前田の記すところによると，黒岩越前から10代目の子孫が黒岩玄治（1805年没）で，土佐国安芸郡川北村（現・安芸市）で医業を営んでいた。玄治には，省輔，源助，尚謙の3男がいた。長男省輔は医業を継いだ。その孫の永馬（後に徳明（のりあき））は西洋医学を習得して日本赤十字社の医員となり，陸軍省予備病院に勤務し，東京・京橋で開業もしていた[10]。血管外科学の研究者としての業績もある[11]。次男源助は郷士となったが，暦学者としてもかなり知られた人物だったようだ。この源助の

長男市郎が涙香の父親である[12]。

さて，以上いくぶん長々しく涙香の先祖の事績にふれた。しかし，決して「回り道」をしているわけではない。私は，こうした「祖先の事績」は涙香の生涯を考えるとき，きわめて重要な意味を持っていると考えている。

先に引いたように黒岩越前の「千古の忠節」を称揚した前田は，さらに次のような興味深い記述をしている。

> 安芸近傍の子供が歴史と云うものを知るに，先ず最初が国虎，越前等の此の事蹟である。彼等は或は父兄に連れられ，或は小学校に於て教師に率いられ実地に就いて初めて歴史の観念を授けられ，其れより，楠公，武内宿禰の話に会得するのである[13]。

涙香が生地で子供時代を送ったのは明治維新前後のころだから，この前田の記述がそのまま当てはまるわけではない。だが，涙香も間違いなく「安芸近傍の子供」だったのである。どのようなかたちだったかは分からないが，幼き日に涙香は遠い先祖の忠節の輝かしい物語を聞いたに違いない。あるいは，父親から「お前のご先祖様は，こんなに偉い人だったのだぞ」といったかたちで昔話を聞かされたかもしれない。

子ども心にどのような刷り込みがなされたかは，むろん判然としない。だが，後述するように幼いころから非凡な才能を示していた涙香である。彼が自らの出自に誇りを持ち，社会的に何ごとかをなさんとする意欲にあふれる若者に育っていったことは想像に難くない。しかも，祖先の忠節が長宗我部という「権力」に対する「反権力」の中で貫かれたものだったことを思えば，その「何ごとか」が，社会の権力への挑戦と強い親和性を持つことになったとしても不思議ではない。

2　黒岩直方

涙香は，両親の黒岩市郎・信子にとって姉二人，兄一人の後に生まれた 4 番目の子どもだった。伊藤秀雄が伝える「涙香の姪といわれる鈴木たま」の証言[14]によると，土佐は戦国時代から経済的理由と人口増加から間引の習慣が根強く残っており，黒岩家では 4 番目の子どもを身ごもった際，間引することに決めていた。しかし，15歳になっていた長女為子[15]が，これを知って強く反対し，命乞いをしたという。

結局，涙香は実父市郎の弟，涙香にとっては叔父にあたる直方の長男として入籍されたことは先に記した。涙香の郷土で涙香とその関係者を長年研究した岡直樹によると[16]，その経緯は次の通りである。市郎と同じ村に住む郷士黒岩藤之進という人物がいた。実子がなく，すでに市郎の弟直方を養子にしていて，「ぜひとも生まれる子をもらいたい」と市郎に申し入れ，涙香を直方の養子にしたという。黒岩藤之進と市郎の間には直接の血縁関係はないが，やはり黒岩越前を先祖に仰ぐ同族[17]である。「間引」云々はともかくとして，涙香が直方の長男として入籍されたのは，同族間で

ごく一般的だった養子縁組が行われた結果と考えていいだろう。

ところで，涙香の本名・周六は変わった名前と言っていい。何か由来があるのだろうか。管見の限り，先行の伝記類の中で，この点にふれているのは岡直樹の本だけである（伊藤も記しているが，これは岡に依っている）。岡は次のように説明している。

> 実父一郎も藤之進も，ともに学者なので前途を祝福して周六と命名（周六は六合にあまねしという意），都合上，当分川北村の生家で養育された[18]。

「六合にあまねし」の「六合」の読みは「りくごう」である。天地と四方で「六」。「六合」は，つまりは「世界」あるいは「全宇宙」を意味する。「あまねし」はふつう「洽し」と表記される。安政大地震（1855年）で死去した水戸学者の藤田東湖の漢詩文「正気歌（せいきのうた）」に「皇道洽六合」（皇道六合にあまねし）の句がある。皇道（天皇の行う政治の道）が世界すべてに及ぶ，といった意味である。涙香の二人の父親がこの漢詩文を知っていたかどうかは分からないが，要するに世界にはばたく人物になってほしいという親の願望が込められた命名だったと言っていいだろう。

先の引用にあるように，涙香は生家で育てられたようだ。実父市郎は暦学者だった父の薫陶も受けたのだろう，文芸のほか算学・天文や砲術・弓槍の技芸を備え，私塾を開いていた。涙香は幼少時に市郎の私塾で学んでいたと思われる。ただし，その期間は長くはなかったはずだ。市郎は維新後，東京に出て大蔵省に出仕したまま郷里に帰らず，1875年11月に亡くなった[19]。涙香は13歳だった。

実父市郎が東京に出た後，涙香は当然，養父直方に世話になっただろう。直方は1837年生まれだから，涙香より25歳年長だった。後に述べるように，涙香は1878年，16歳で大阪に出たときも当時，大阪の上等裁判所で判事をしていた直方を頼っている。

幕末・維新の激動期，黒岩直方は「勤王の志士」として波乱万丈の日々を送った人物である。私は，涙香のその後の人生にとって，直方の影響はきわめて大きな意味を持ったと考えている。「黒岩越前の逸話」を聞いて育った涙香の前には，その直系の子孫としての矜持を持ち，時代の動きに果敢にコミットした「実物」がいたのである。涙香が本人から直接ないしは周囲の人々から聞いたに違いない幕末・維新期の直方の履歴を追ってみる[20]。

武市半平太（瑞山）を顕彰する瑞山会が『維新土佐勤王史』を編纂・刊行したのは1912年である。武市は土佐勤王党を組織し，一時期，土佐藩の藩論を主導したが，政局の転換とともに藩の参政・吉田東洋を暗殺した罪によって，1865年，切腹を命じられた。『維新土佐勤王史』の冒頭には，土佐勤王党結成時に血盟した192人の名簿が掲載されている（そこに坂本龍馬の名があることはよく知られているだろう）。黒岩直方はその血盟簿には名前がないが，次の「血盟簿以外の勤王党同志人名録」にその名が記載されている。直方（治部之助のほか，当時の常として多くの変名を使った）は，土佐勤王党結成時の血盟には加わっていなかったものの「同志」として認められていたのである。

直方がいつごろから国事に奔走するようになったかは不明だが，坂本龍馬が最初の脱藩をした1862年３月と同じころに直方も脱藩して京都に出たようだ。『維新土佐勤王史』に直方の名前が最初に登場するのは，「七卿落ち」と呼ばれる出来事に関する記述の部分である。1863年，公武合体を進めるべく，薩摩・会津両藩は京都から尊攘派の長州藩を追放する。三条実美ら７人の尊攘派の公家も京都を追放され，長州に落ちのびた。いわゆる８月18日の政変である。このとき，直方は海路，三田尻に渡った三条実美らの護衛を務めた一人だった。

長州藩が京都に攻め上った翌年６月の禁門の変に際しては，直方は各藩の脱藩藩士らで組織した忠勇隊に加わり，長州藩勢とともに行動する。長州勢の敗戦が明らかになった後，忠勇隊内部では決戦―自決を主張する意見が強かったが，直方らは再起を期して，長州に戻った。この後，第一次長州戦争に際しては，直方は同志数人とともに筑前・黒崎に落ちる三条実美に随従する。

三条はこの後，他の４人の公家とともにさらに大宰府に移り，時勢の転換を待つ。直方はその後も三条に近習として仕えた。薩長和解を目指す坂本龍馬とも，彼が三条らに会うために大宰府を訪れた際に交流があったようだ。大政奉還後は，三条らとともに薩摩藩の春日丸にて海路，京都に戻る。しかし，時代の激動はまだ続く。直方は戊辰戦争に従軍し，鳥羽伏見の戦い，江戸での彰義隊討伐，さらに会津戦争にも加わった。

以上が黒岩直方の維新前の簡単な履歴である。歴史に名を残す派手な活躍があったわけではない。三条実美とともに行動し，その「護衛役」に徹した感もある。

七卿落ちのときからほぼ行動をともにしていた土佐藩士に土方久元がいる。土方は200石取りの上士の家に生まれながら，土佐勤王党の血盟に加わり，早くから京都で尊攘派の志士として活動した。土方は自ら薩長の和解に努める行動も行っており，激動の時代の舞台に顔をのぞかせている。一方，同じように三条実美のもとにありながら，直方は表舞台に出ることはなかった。

維新後，土方は東京府判事から始まって，宮中顧問官，宮内大臣などを務めた後，内閣制度発足時には第１次伊藤内閣の農商務大臣として入閣し，後には宮内大臣を長く務めた。伯爵にも叙爵される。

これに対して，黒岩直方の維新後の官歴はずっと地味である。おそらく土方の関係があったためだろう，当初は東京府に出仕し，大属，権典事，典事を歴任した後，1875年６月，司法省に転じ，大阪上等裁判所で検事，判事を勤め，長崎上等裁判所判事を経て1878年９月，東京裁判所，翌79年12月には大審院併任となる。さらに，81年10月，広島控訴院，翌年９月，再度大審院判事になった。

大審院は現在の最高裁判所に当たる。その判事まで上り詰めたのだから，「地味」という評言は当たらないとも言える。だが，当時，司法官のステータスは必ずしも高くない。しかし，幕末・維新期に時代の激動にコミットしつつ，終始表立った行動はしなかった直方には裁判官はふさわしい人生だったようにも思える。もっとも，直方は1884年２月に大審院判事を辞職してしまう。47歳だった。「人を裁くのが嫌になった」というのがその理由という[21]。この後，直方は宮内省に出仕し，宸翰御用掛，吹上御苑勤番を勤める。「宸翰」は天皇自筆の文書のことだが，「吹上御苑勤番」とと

もに具体的な仕事はよく分からない。閑職だったことは間違いないだろう。1889年 2 月，非職になった後は，山階宮家の家令などを勤めた。1900年12月 2 日，63歳で死去する。

繰り返して言えば，黒岩直方は歴史に名を残す派手な活躍をしたわけではない。最後に「宮家の家令」という，これまた「裏方」を勤めたあたりには，この人物の性格が垣間見える気もする。だが，思えば，「派手な活躍」は表面的なことに過ぎない。直方は土佐の城下から離れた村の郷士に生まれた人間としては，十分以上に時代と切り結んだ人生を送ったと言っていい。「六合」（世界）にはばたくという名前を当たえられた少年にとって，それは一つのロール・モデルになっただろう。

3　大阪英語学校

涙香の勉学が実父市郎の私塾からスタートしたとの推測を述べた。市郎は明治初年には東京に出てしまったから，その期間は長くはなかっただろうとも指摘した。では，その後，涙香はどのようにして後年の「多彩」「多才」な仕事をこなす学識を身につけたのだろうか。ここでは，涙香の勉学の軌跡をできる限り明らかにしたい。

ふたたび前田耕作の記述を参照しよう。実父の私塾で学んでいた当時の逸話である。

> 先生［涙香］は初め家塾に於て和漢算を習ったが，衆弟子と一所に習うのを好まれなかったらしい。此当時黒岩塾で勉学した上田喜耕氏は「私は常に市郎先生の内で泊まったが，私達の寝る時は周六さんはまだ起きて居た。そして私達が眼を覚ました時はもう起きて居た。遂に数年間枕を並べて居た時を知らない」と云って居る。又其他の場合に衆弟子は夜毎に塾に集まって種々なる競技を為して遊んだが，先生は遊戯をしなかった。……後年先生の多趣味な事は万人が承知して居るが，少年時代の先生は余り遊戯をされなかったのであろうか。彼等が色々と競技に熱中して居る時に屹度仰臥して本を引っ張り出し居られたとの事である[22]。

なかなかに興味深い証言である。ここからは，衆に交わらず，ひたすら自らの能力を頼みにする「少年像」が思い浮かぶのではないか。自尊心まるだしの，いくぶん鼻持ちならぬ少年である。周囲の子どもたちが遊戯をしていても加わらなかったという点も，前田が指摘しているように，後年の多趣味人涙香から想像できない。「俺はお前たち凡人と違うのだよ」という自恃の気持ちを露骨に態度で示しているのである。

涙香の自尊心の背景には，「忠節・反骨の武人にしてわが先祖の黒岩越前」や「勤王の志士にしてわが叔父の黒岩直方」のことがあったかもしれない。いずれにしろ，涙香がこういう少年だったということは記憶しておかなければならない。

私塾での勉学の後，先行の各種伝記は，涙香が「文武館」に通って漢学などを学んだと記している。これも出典は，前田耕作の文章である。前田は次のように記している。

先生［涙香］少年の頃，約一里ほど離れた安芸浦（現今の安芸町）の文武館と云うのへ通って漢文，習字等を学ばれた[23]。

この「文武館」については，インターネットのサイトなどで「藩校の」という修飾語をつけているものがある。しかし，「藩校」ではない。土佐藩の藩校は高知城下にあったし，その藩校が「文武館」と呼ばれた時期はあったようだが，1865年に「致道館」と改称されている。先行の文献はこの前田の記述通りに「安芸浦の文武館」としているが，当時の安芸郡内に「文武館」という私塾は見出せない。私はこの「文武館」は，当時の土居村（安芸浦はその中心部である）にあった秉彝（へいい）学舎のことではないかと推測している。この難しい名前の教育機関は，安芸郡一帯を所領としていた五島氏（山内家の家老の一人）が創設した郷学である。難しい呼称故に，地元では「文武館」と呼ばれていたのではないか。

「文武館」についての考証は置くとして，この文武館での出来事として前田が記す次の挿話は，涙香の性格を知る意味で示唆的である。

文武館で学んでいた涙香は，ある日，補教の楠瀬友吉という人が解釈した漢文について彼の意見に反対を唱えた。涙香と楠瀬との間の激論は数刻に及んだが，涙香は納得しなかった。遂に楠瀬は涙香を叱罵した。「叱罵」は，前田の表現をそのまま使っているのだが，単なる叱責ではなく，罵倒する文言を含んでいたのだろう。いまふうに言えば，「こんなに説明してやっても分からんのか。この馬鹿者めが」といったところか。涙香はこの事件の後，文武館をやめてしまう。高知城下で自炊生活をして，森沢沮という人の塾[24]に通うことにした。

名前まであげているし，その後，森沢塾に通うことになった経緯を説明したものとしてほぼ実話と考えていいように思う。補教というからには，楠瀬という男も若かったのだろう。10代前半の少年涙香のナマイキな物言いがカチンと来たに違いない。自己の学力に満腔の自信を持つ，自尊心の強い若者がここにいる。

森沢塾に入ったのは1876年９月４日という。涙香は14歳である。1878年９月，大阪に出るまで２年間，ここでやはり漢学を学んだ。当時の彼の漢学の力量と早熟な文才を教えてくれる「鏡説」と題した文章が残っている[25]。大阪に行く少し前，川北村に隣接する伊尾木村（現・安芸市）在住の医者で学問にも通じていた川淵春山に添削を乞うたものという。

「鏡之為物也。以銅作之。其形或方形或円。而其影善映万物之像」と書き出された漢文は全文600字ほど。以下は末尾の部分である（句点は出典の表記に従ったが，原文にはなかったと思われる）。

嗚呼人頼以卜容之醜美者明鏡也。知行之善悪者人眼也。我邦自古以鏡為霊。列神器之一以表九五。予雖不知其謂。想或謂人君容臣下諫。而改行宜如人視明鏡而正容乎。

黒岩所適[26]　拝草

漢文の巧拙を評する能力は私にはまったくないが，何となく稚拙な感じもしないではない。だが，易学で「天子の位」を意味する「九五」を使ったりしているところに，勉学の成果とともに，自らの知識をひけらかす「知ったかぶり」的な若者の姿も思い浮かぶ。

もっともこの文章の「鏡」を「新聞」に読み替えて「涙香の生涯のモティーフが，明らかにうかびあがってくる。少年は自分ではよくわからないままに，自分の生涯の見取り図をえがきあげている場合があるものだ」と書いたのは，鶴見俊輔である[27]。鶴見は先に引用した部分の「予雖不知其謂」以下を次のように現代語訳している。

> わたしは，そのわけを知らないが，あるいは君主が臣下の忠言をいれて行いを改めること，人が見事な鏡を見てみずからの姿を正しくするのと同じようであるべきと考えて，そういうしきたりにしたのかもしれないと，想像する。

「「君」という文字を権力者とよみかえ，「臣」という文字を「民衆」とよみかえるならば，この文章は，政治についてジャーナリズムの果すべき役割をのべたエッセイとして読むことができる」と鶴見は高い評価を加える。

涙香はこの時点で新聞人になることを考えていたわけではないから，これは“深読み”に過ぎることは間違いないのだが，たしかに後年の仕事と重ねるとき，若き涙香が「鏡」をこのように論じていたことは興味深い。ただ，私としては「ジャーナリズムの果すべき役割をのべたエッセイ」として読む前に，涙香の若書きの文章（現存するものとしては一番古いものと思われる）の主題が「鏡」だったことに素朴に驚きを覚える。後年，新聞の世界に生きた涙香にとって新聞は何よりも「社会を映す鏡」だっただろうからである。

さて，このようにして漢学を学んでいた涙香は前述のように1878年９月，大阪に出る。故郷を離れた涙香の視界は一気に広がった。私たちも，ここで少し歴史の流れを広い視野で復習しておきたい。

中央政府における土佐の「代表」とも言うべき板垣退助が，征韓論政変で西郷隆盛らとともに参議を辞職したのは1873年10月のことである。板垣は翌74年１月，ともに参議を辞職した副島種臣，江藤新平ら７人と連名で民撰議院設立建白書を左院に提出する。この建白書は，イギリス人ジャーナリスト，ジョン・レディ・ブラックが創刊した日本語の新聞『日新真事誌』に提出の翌日掲載された。ブラックの積極的な編集方針もあって，民選議院開設の可否をめぐる「民選議院論争」が，『日新真事誌』などの新聞を舞台に繰り広げられる。２月には，江藤新平による佐賀の乱が起きた。一方，土佐に戻った板垣は４月，立志社を創設し，自由民権運動を展開する。

維新の激動が収まった明治という時代は，いままさに第二の激動の時代に突入した。こうした中，土佐は大久保利通らが主導する「有司専制」の政府に対する反政府の牙城となったのである。1876年には神風連の乱，秋月の乱，萩の乱と不平士族の反乱が続き，翌77年２月には遂に薩摩の西郷が立つ（西南戦争）。土佐では西南戦争が最終局面に入っていた８月，後に「立志社の獄」ないし

は「立志社陰謀事件」と呼ばれる事件が摘発された。

本稿では詳しくふれることができないが，これは西南戦争に呼応して挙兵し，政府転覆を図ろうとしたとされる事件で，立志社の林有造，大江卓，竹内綱，片岡健吉ら40数人が逮捕された[28]。

涙香はこの事件に直接関わりを持たなかっただろう。立志社のメンバーではなかったし，何よりまだ15歳だった。ただ，高知にあって，すでに述べたような志向を持つ若者が目前で起きた時代の激動に無関心だったはずはない。翌年９月の大阪行きは，すでに藩はなくなっていたけれども，15歳になった涙香にとって，それはかつて養父直方が行った脱藩に比類する行動だっただろう。

その直方は当時，大阪上級裁判所の検事から判事になっていた。涙香が直方を頼って大阪に出たことは前に記した。大阪に出た後の涙香の軌跡として明らかになっているのは，当時，大阪英語学校に入学したことである。大阪英語学校は1869年に大阪府立として設立された洋学校を源流に，さまざまな統合や名称変更を経て1874年12月に大阪英語学校となったもので，現在の大阪市中央区大手前にあった。涙香が入学した翌79年４月には大阪専門学校として新発足し[29]，やがて京都に移り，旧制第三高等学校となる。

校名が「専門学校」に変わったことからも分かるように，もともと「英語学校」と称していても，英語だけでなく，数学や化学などの授業もあった。涙香の入学はおそらく直方の勧めによるものと思われる。大阪英語学校は当時の大阪にあってもっとも整った西欧流の教育を提供する先進的な機関だったと言えるだろう。

その先進ぶりを教えてくれる一例は，團琢磨の存在である。團は岩倉使節団に同行して渡米し，そのまま米国に留学し，マサチューセッツ工科大学鉱山学科を卒業した。帰国後，大阪専門学校助教授として，化学と数学を担当した。大阪英語学校が専門学校に改称した直後の時期である。團はその後，東京大学理学部助教授となったが，さらに工部省を経て三井三池炭鉱の経営に当たり，成功する。三井合名会社理事長として三井財閥の総帥として政財界で権力を発揮したが，1932年，暗殺された（血盟団事件）。

その後半生は本稿に直接関係ないが，つまりは大阪英語学校・大阪専門学校は，米国で最新の学問を修めた團琢磨のような人物が教鞭をとっていた学校だったのである。その團が，涙香没後，自らが教えた当時の涙香について，「将来を嘱目された青年」というタイトルで短い思い出を記している。以下は，その一部。

> ［化学と数学の］講義を聴きに来る青年の中に「黒岩大」という一青年があった。級中に擢（ぬき）ん出た秀才で必ずや将来為す有るの材となるであろうと，当時嘱目した事であったが，君は果して後年一世に名を成したのであった[30]。

米国帰りの若き英才にして「級中に擢ん出た秀才」と感じたのであるから涙香の非凡さは相当に目立ったのだろう。漢学を学んでいた涙香だったが，化学や数学でも秀でていたようだ。数学の才能は暦学者であった祖父や父の血と言えるかもしれない。数学の才については，後年の話だが，

「数学も得意で，随分難解な数学も手もなくやって除けた。屡々(しばしば)外国から高等数学に関する書籍を取り寄せ研究していた」という都筑孝介の証言もある[31]。

團琢磨を唸らせた化学と数学の秀才ぶりだったが，一番熱心に勉強したのは英語だった。先の都筑は，涙香が大阪英語学校に通う一方で，「英人カロザウスの家に寄寓して英語の研鑽に没頭していた」[32]と記している。「カロザウス」がいかなる人物か分からないが，この時期の英語の勉強が後に大いに役立つことになる。

この時期の証言をもう一つだけ紹介しておきたい。これも後の涙香を考えるとき，重要なポイントである。証言者は，山本秀樹。涙香とは同郷の幼なじみで，大阪英語学校時代の学友でもある。

> 君が大阪に在りし時は僅か十五六歳の年少なりしも，時々論文を大坂日報に寄せ，主筆関新吾氏をして其奇才に驚かしむ。又英語学校の校内には毎週演説会あり。生徒の有志をして演説せしむ。君演壇に起つや弁論風生年長者を驚殺す。後年文章に弁舌に其名を知らるゝに至りしは已に栴檀の香を発せしものなり[33]。

『大坂日報』は『大阪毎日新聞』の前身で，1876年２月に創刊された。涙香が主筆の関新吾を驚かせたという論文はどんな内容のものだったのだろうか。涙香が大阪英語学校に在籍したのは1878年９月から翌79年夏までと思われる（この下限については後述）。前述したように，この途中，79年４月に大阪専門学校に名称が変わる。この期間の『大坂日報』の投書（投書はほぼ連日１本，ときに２本掲載されている）を精査したが，「黒岩周六」あるいは「黒岩大」という投書者を見つけることはできなかった。

ただし，1879年１月28日に「在大坂(ママ)英語学校　近藤堅三」，翌29日に「大坂(ママ)英語学校寄宿生徒　山口県士族　道家清吉」，「大阪英語学校寄宿生徒　兵庫県士族　沢野良」と，大阪英語学校の学生であることを明示した投書が合わせて3本あった。この３本以外に「大阪英語学校」を記した投書はなかった。便宜的にこの３本を①近藤投書②道家投書③深野投書として，次に内容を見てみよう。

近藤投書は，「手淫ノ害」に関するものだ。校内の演説会で「米国名医「ジョルダン氏」著述ノ「フヒロソヒー，ヲフ，マリジ」ノ一部分ヲ以テ演ゼンコトアリ」として，その要点を投書として寄せたとある。洋書を読んだ上での内容の要約であることや演説会で演説したという点は，投書者が涙香であることを類推させるが，内容は「局所ノ兆候　男根ノ部」「一般ノ兆候第一　筋，呼吸器，循環器，滋養器等ニ関スル部」「一般ノ兆候第二　意識ニ関スル部」に分けて症状を列記したもので，相当にマニヤックである。

道家投書は，新年に当たって，一休禅師の「門松ハ冥土ノ旅ノ一里塚目出度モアリ目出度モ無シ」を引いたりして，人の一生が短いことを嘆いている内容である。人生を50年として「一年ヲ三百六十五日ト為スレハ五十年ハ則チ一万八千二百五十日ナリ」といった計算をしているあたりは，暦学者の家系に生まれ，本人も数学が得意だったという涙香らしいとも言えるかもしれない。

沢野投書も新しい年の到来という機をとらえたものである。「旧年去リテ年季全ク革リ」と書き出し，「予モ亦旧悪ヲ悔悛シテ」と新たな決意を語ったものである。内容はいくぶん抽象的である。「人ノ世ハ内外ノ道ヲ分弁センコトヲ要ス」として，衣服や外貌などの外見にとらわれてはならないと説く。「人倫」と「天倫」の違いを指摘しているあたりは，後に『天人論』を書く涙香の片鱗をうかがわせる。

投書は本名を隠して適当な名前で投稿されることがふつうだった。内容から見て，この3本とも涙香による投書と考えていいだろう。いずれも，政治や社会を論じたものではない。むしろ相当に衒学的である。ここにはまだ「政治青年」は姿を見せていない。志を抱いて土佐を後にして大阪に出た涙香だったが，その志はこの段階ではむしろ「学問」に向かっていたように思える。

4　政治青年

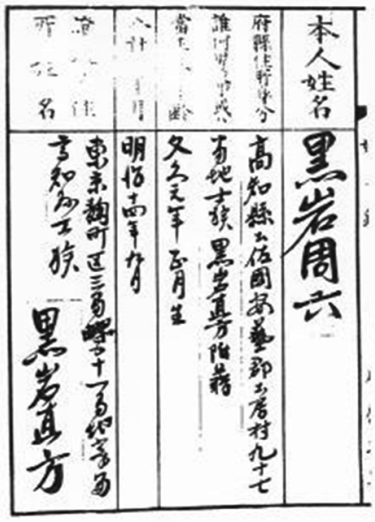
涙香の大阪英語学校・大阪専門学校在籍は１年足らずだったと思われる。涙香が入学した翌1879年は明治期最大のコレラ流行があった年だった。

もともとガンジス川流域の風土病だったコレラは，19世紀に入ると世界的な交通の活発化とともにアジア，ヨーロッパ，アメリカ大陸へと広がり，パンデミー（世界的大流行）を繰り返した。この時期のコレラはアジア型（コレラ・ビブリオ）と呼ばれるコレラ菌によるもので，今日は発生もまれになった「エルトール小川型」と違い，ひとたび流行が起きると，感染者は急速に拡大し，致命率も非常に高かった[34]。

幕末に最初の流行を記録した後，明治期になってもコレラは繰り返し大流行した。1879年は６月ごろから流行が始まり，秋まで続いた。『医制百年史』（厚生省編，ぎょうせい，1976年）によると，この年１年間に全国で16万2627人がコレラに罹患し，10万5826人が死亡している。致命率は65パーセントである。

この年のコレラ流行は西日本が中心で，大阪でも猛威を振るった。９月２日の『朝日新聞』（大阪発行）の「大阪府録事」に掲載されている大阪府の発表によると，同府内の年初から８月31日までのコレラ患者者は8216人，うち死者は6396人である。致命率は全国的な水準よりはるかに高く，77パーセント以上。

こうしたコレラの猛威に対して，大阪府は6月18日，「虎列剌病流行に付ては学校近傍該病蔓延の徴候有之候はゞ予防の為休学可致此旨相達し候事」という布告を出す（『朝日新聞』1979年６月12日）。大阪英語学校は６月19日から休校になった（『朝日新聞』６月20日）。学校が休校になっただけでなく，涙香が入っていた中之島の寄宿舎も閉鎖されてしまった。頼るべき直方は涙香の上阪まもない1878年９月20日に東京裁判所に異動していた。学校はいつ再開するか分からない。こうして，涙香は東京に行く道を選んだのである。もっとも自他ともに認める「大秀才」は大阪の地が物足りなくなったのかもしれない。東京で我が才能を試したい。あふれるばかりの自尊心と出自への誇りを持つ若者がそう考えたとしても不思議ではない。その意味ではコレラ流行は一つのきっ


本人姓名
黒岩周六
高知縣土佐國安藝郡土居村九十七
有地士族 黒岩直方 附籍
久久元年正月生
明治十四年九月
東京麹町区三番地字十一番地字番
高知縣士族
黒岩直方

かけに過ぎなかったとも言えるだろう。

東京にはむろん直方がいたわけだが，上京に際しては姉の為子を頼った。為子が結婚した秦呑舟は当時，東京・銀座で医院を開業していた（注14参照）。なぜ養父にして叔父である直方ではなく，為子だったのだろうか。伊藤秀雄が「叔父さんに実子が出来てから折合が悪くなった」という証言を紹介している[35]。

直方に実子（女子２人）が出来たことは間違いなく，直方の家を継ぐ必要がなくなったという事情はあったとしても，私は涙香が大阪専門学校を退学して東京に出た際，為子を頼ったのは別の理由だったと推測する。推測に推測を重ねることは慎まなければならないが，幕末・維新の動乱期に生きた直方は涙香にはむしろ平穏な人生を望んだのではないか。大阪専門学校を正規に卒業して，学問の道に進むことを期待していたように思える。涙香にしてもそれを分かっていたはずで，その期待を裏切った以上はもう直方は頼れないと考えたのではないか。当時，秦呑舟が開業していた医院は繁盛しており，為子はかなり裕福な生活を送っていたようだ。

上京した涙香は最初，駿河台にあった成立学舎に入学した。成立学舎は明治期に次々に誕生した民間教育機関の一つである。今日，その後身の学校はないが，夏目漱石の履歴と関連して，その名を記憶している人がいるかもしれない。漱石は府立第一中学校（現・日比谷高校）や二松学舎で学んだ後，1883年，16歳で成立学舎に入学した。漱石の各種年譜によると，大学予備門（後に第一高等学校）入学に必要な英語を学ぶためだったという。翌84年９月，漱石は大学予備門入学を果たしている。

成立学舎は1876年10月に開校した。10月31日の『読売新聞』の「<ruby>禀告<rt>しらせ</rt></ruby>」欄に開校の記事が出ている。「成業大凡二ヶ年を期として英学数学及び漢学を教授」とある。漱石の事例から分かるように成立学舎は「英語学校」として評価が高かったようだが，英語以外も教えていたわけだ。ただし，英語教育が「売り」だったことは明らかで，涙香が入学して間もない時期と思われる1879年11月２日の『読売新聞』には，「今回英人「ハルハックス」を雇い夜分英語学を教授候」という広告が掲載されている。

大学予備門に入るべく，夏目漱石が英語を学んだ「評判の英語学校」で，涙香は漱石の４年ほど前に大阪英語学校以来の英語の力に磨きをかけていたのである[36]。しかし，涙香は漱石のように大学予備門に進むことはなく，成立学舎を退学する。退学の時期は不明だが，1881年９月に慶応義塾に入っていることは間違いない。「慶應義塾入社帳」[37]で自筆と思われる姓名録を確認できた（**上の図版**）。もとの書類にある字が薄くなっていて読みにくいが，「黒岩直方」の名前が書き込まれ欄は「証人ノ住所姓名」である。上京に際しては姉為子を頼った涙香だったが，ここでの保証人は直方である。無断で上京して来た涙香と直方の関係は修復したのだろう。

この時期の涙香については，漆間真学の回想がある。漆間は1882年11月，涙香が『同盟改進新聞』を創刊した際の同僚であり，ともに慶応義塾で学んでいた古くからの友人だっただけに，当時の涙香の生活の実像の一端を教えてくれる貴重な内容である。少し長くなるが引用する。

> 私が黒岩君と交際を始めたのは君が大阪の英語学校を止して上京し芝愛宕下の信楽館という下宿屋に居て慶応義塾に通うていた時分の事である。当時の君は書生としては余程贅沢の方で我々が書物を買えないで仕方なしに図書館に籠って勉強しているのに，丸善，東洋館，中西書店などへ注文して高価な政治法律書を外国から取寄せ読破したものだ。又人知れず横浜在留の外人ケリー氏の経営する書店に出掛け新刊書又は新聞などを見ては盛んに欧州の形勢を論じて友人達を煙に巻いたものだ。……
>
> 新らしき書物によりて自由に勉強の出来る当時の君は，塾に通うのをもどかしく思い，遂々退学して了った。君の其頃の裕かな学費の出所に就てはよく判らないが何でも君の義兄秦呑舟氏が当時銀座で大した暮しをしていたので其所から出たらしい噂であった[38]。

漆間の書いている「噂」は本当だっただろう。秦呑舟はすでに述べたように医師として繁盛した医院を経営していた。秦本人からではなくとも，秦の妻であり，涙香の姉である為子から金銭的な援助があったと考えていいだろう。

慶応義塾を退学した理由についても当時一緒にいた人物の証言だけに信用できる。英語の読解能力はもう十分についた。書物は手に入る。自己の能力に自信を持ち，常に前のめりに生きてきた涙香である。慶応義塾で学ぶことを「もどかしく思」えたというあたりは，さもありなんといった感じがする。

もう一つ，この証言で重要なのは，この時期の涙香が手にしていた原書が「政治法律書」だったという点である。後に膨大な翻訳書・翻案書を刊行し，「探偵小説の元祖」とまで言われた「文学者涙香」は，ここにはまだまったくその姿を見せていない。

もちろん「政治」に対して上京後，突然関心を持つようになったというわけではないだろう。大阪英語学校当時も原書で「政治法律書」を読んではいたはずだ。だが，その関心はすでに述べたように，むしろ「学問」に向かっていたように思える。やはり，上京後の環境の変化は涙香に少なくない影響を与えたに違いない。演説会が開かれる頻度[39]や登場する演者の質は，大阪とかなりの違いがあったはずだ。政治を論じる新聞・雑誌の数もまた大阪の比ではなかった。間もなくその両方に涙香は身を投じることになる。彼の中で眠っていた（あるいは培養されていた）政治への関心が，東京という新しい環境の中で一気に噴出した。涙香は書物の世界を飛び出て，行動し始めた。「政治青年」の誕生である。

5　黒岩 大

文筆と演説の両面で「政治青年・涙香」の登場が確認できるのは，1881年末以降である。21歳

の涙香は，「黒岩大」と名乗るようになった。最初の舞台は『東京輿論新誌』だった。同誌は1880年11月に創刊した嚶鳴社系の政論雑誌で，大岡育造が主幹を務めていた。毎週土曜日に刊行された。嚶鳴社は沼間守一が創設した民権結社である。討論会と称する演説会も定期的に催し[40]，末広重恭（鉄腸），島田三郎，肥塚龍，田口卯吉らが登壇した。

涙香が『東京輿論新誌』にかかわることになったきっかけについては，主幹だった大岡育造の次のような回顧談がある。

> 当時黒岩君は雑誌社（神田淡路町）に近い成立学舎の生徒であって，盛んに政治論を寄書したものだ。君の原稿は中々奇麗で，此の点に於て自分は福地源一郎翁と君とのとを相称する。
>
> 君の論旨は可なり確かりしたもので，其の頃は寄書といえば全くの無償であったから，君は唯だ趣味として寄書したのだが，併しその原稿が多くて幾(ママ)んど輿論新誌編輯者の一員であったかの如くに見えた[41]。

原稿の奇麗さについて大岡が涙香と相称している福地源一郎は，いうまでもなく『東京日日新聞』社長・主筆として活躍した福地桜痴である。論旨についてはすぐ後でふれているので，前段の「奇麗さ」というのは原稿の中身ではなく見かけのことを指していると思われる。涙香会編『黒岩涙香』の巻頭には涙香の自筆原稿の写真が収録されている。たしかに「直し」や「挿入」がほとんどなく，読みやすい字で原稿用紙のマス目をきちんと埋めている。

大岡の回顧談に「輿論新誌編輯者の一員であったごとく」とある点は多少誤解を招く記述かもしれない。後でふれるように涙香は「……あったかの如く」ではなく，正式に『東京輿論新誌』の編輯局員になっている。その点や『東京輿論新誌』に掲載された「黒岩大」名による社説の筆禍については後にふれるとして，その前に，この時期，「黒岩大」が文筆だけでなく，演説においても見事な「政治青年」だったことを見ておこう。以下，この時期に「黒岩大」が登場した演説会である（カッコ内は演題）[42]。

○1881年12月４日　柳橋万八楼　共立会員演説討論会（人民に武器を帯びるを許すの可否・発議者）
○1882年２月12日　浅草井生村(いぶむら)楼　共立会政談演説討論会（自称漸進主義を論ず）
○1882年７月18日　浅草井生村楼　国友会政談討論演説会（魯国政府の存亡）
○1882年９月23日　浅草井生村楼　（人トハ何ゾ）
○1882年11月19日　木挽町明治会堂　政談演説会（官吏を論ず）
○1882年11月25日　浅草井生村楼　国友会政談演説討論（政党条例を論ず）
○1882年12月16日　柳橋万八楼　共立会政談演説会（専制政府は無主義を以て主義とせざる可からず）
○1883年１月７日　浅草井生村楼　国友会政談演説会（尚ぶ所を知れ）

井生村楼，万八楼，明治会堂はいずれも当時の代表的な演説会場である。「黒岩大」は演説とい

う新しいパーフォーマンスが登場したばかりの東京で，それなりに知られた演者だったと言えるだろう。演説に対する涙香の傾倒ぶりを教えてくれるのは，『雄弁美辞法』の翻訳である。1882年３月，「末広重恭序　堀口昇校閲　黒岩大訳述」として，輿論社・秩山堂から刊行された（**左の図版**）。原著者は「米国法律博士クワツケンブス氏」とある。

内容は修辞法 rhetoricについての解説が大半を占めている。涙香はrhetoricを「話色」と翻訳して細かい技法を解説している。演説は新時代のパーフォーマンスとして注目され，多くの技法書類が刊行されているが，「ハウ・ツーものの多くが身振りや容貌を重視しているなかにあって……〔『雄弁美辞法』は〕言語表現に力点を置いている」と，そのユニークさが評価されている[43]。

さて，先に『東京輿論新誌』の編輯員をめぐる大岡の記述にふれた。涙香が間違いなく同誌の編輯員（編輯局員）になったことは，同誌第62号（1882年１月21日発行）の「雑報」欄に次の記載があることによって明らかである。

○黒巌君　黒巌大氏は今回弊社の編輯局員になられたり。

先に引いたように，大岡は涙香が編輯局員になったとは言っていない。涙香の詳細な年譜[44]の作成者でもある高松敏男が「明らかに大岡育造の思い違いだと考えられる」[45]と指摘しているが，私は必ずしも「思い違い」と考えなくてもいいのではないかと思っている。涙香は1881年９月に慶応義塾に入学しているから，編輯局員になった当時，熱心に通っていたかはともかく，まだ学生だった。涙香はいわば編輯局員に抜擢されたのである。大岡は，その抜擢の理由をここに記していると考えたらどうだろうか。涙香の寄せる投書（寄書）は質が高く，次々に採用されて誌面を飾る。これではまるで「編輯局の一員」と同じではないか。いっそう彼を編輯局員にしてしまおうということだったわけだが，大岡はこの最後の部分にはふれなかっただけではないのか。

むろん，大岡の回顧談に無理につじつまを合わせる必要はない。ここで重要なのは，涙香の投書がたびたび『東京輿論新誌』に掲載されたということである。「黒岩大」の筆名を使ったデビュー作は，1881年11月５日発行の第52号である。「生糸紛議の結末如何」というタイトルの論説が「黒岩大」の名前で掲載されている。この後２カ月半ほど経った第62号に先に引いた編輯局員への登用の記事が載った。第52号の投書だけではとても大岡が言うような状況にはならないだろう。このデビュー作の前，すでに涙香の投書は編輯局員と見まがうほどたびたび掲載されたはずなのだ。

『東京輿論新誌』は巻頭に「社説」を載せ，その後に「論説」のタイトルで１，２本の投書を載せ，最後は「雑報」という誌面体裁である。「社説」は同人が署名入りで書いている。このほか，

イギリスの議会政治に関係した法令などの翻訳なども掲載されている。「論説」は署名入りだが，「論説」欄に載っている投書は，ペンネームと思われるものがほとんどである。

「黒岩大」が登場する以前，圧倒的に数が多く，目立つ投書者は「美輪壮夫」である。第26号（1881年5月7日発行）に「政府ヲ亡ス者ハ何ソ」で登場した後，27号，29号，31号，33号，37号，49号，51号，58号，65号，68号の各「論説」欄に投書が掲載されている。群を抜いて目立つ投書者である（58号は「政府新聞ヲ論ズ　美輪壮夫演説」とある）。

私は，この「美輪壮夫」こそ「黒岩大」以前の涙香ではないかと推測している。名前の前には，29号には「高知県」，65号には「在東京」とある。その他は名前だけでしか載っていない。涙香は「高知県士族」だったから，「高知県」とあってもおかしくはない。「壮夫」の「壮」と「黒岩大」の「大」とは同じような意味がありそうだ（二つをつなげると，「壮大」である）。「壮夫」は「壮年の男」のほか，「血気盛んな男」という意味もある。「美輪」は「身は（自分は）」の当て字かもしれない。彼以外に「候補」はいない[46]。

とはいえ，難点がある。涙香が「黒岩大」として登場した後も「美輪壮夫」は登場している（65号，68号）。次に述べるように，「黒岩大」は63号に掲載した「開拓使官吏ノ処分ヲ論ズ」と題した社説で，仮編輯長の坂本清操とともに官吏侮辱罪に問われる。したがって，この「難点」は，裁判が係争中だったから「黒岩大」を一端引っ込め，「美輪壮夫」を再登場させたと考えればクリアできるかもしれない。

いずれにしろ，この問題に決着を付けるとしたら，「美輪壮夫」の投書をくわしく分析して，テーマや文体について涙香と比較する作業が必要だろう。今後の課題としたい[47]。

涙香は「黒岩大」を名乗った理由について何も語っていない。しかし，「大」に込めた意味は明らかだろう。「大」は，つまりは涙香の自己認識だった。大なる自分，あるいは大なる人間になるはずの自分――20歳を少し超えたばかりの自尊心あふれる若者は，そう考えていたのである。

6　筆禍

黒岩大が『東京輿論新誌』の編輯局員になって初めて書いた社説は，1882年１月28日発行の第68号に掲載された。「開拓使官吏ノ処分ヲ論ズ」がそれである。先にふれたように，この社説が官吏侮辱罪に問われた。

開拓使は北海道開拓のために設けられた役所である。1872年から10年計画で1400万円もの巨費が注ぎ込まれた。計画の満期を控えて，1881年，薩摩出身の開拓長官黒田清隆は開拓使を廃止し，官有物を同郷の五代友厚らに38万7000円無利息30年賦という破格の条件で払い下げようとした。政府内で大隈重信がこれに反対し，民間でも自由民権派が新聞，演説会などで激しく攻撃した。明治14年の政変のきっかけとなった開拓使官有物払い下げ事件である。結局，大隈重信が参議を追われて下野する一方，払い下げは中止となり，1890年に国会を開設するとの詔書が出される。

「嗚呼開拓使ハ夫レ怪物乎何ゾ其風説ノ吾人ヲ驚スノ多キヤ」と書き出された黒岩大の社説は，

開拓使の廃止に伴い，新設の府庁に雇用される一部以外，大半の官吏が農商務省に転任するという風説を捉えて，事実であれば，無用な情実人事であると批判したものである。英米の実情などにもふれ，畳みかけるような文体はなかなかに小気味よい。最後は，次のように結ばれている。

> 焉ンゾ情実ヲ以テ去ル可キ者ヲモ去ラズ放ツ可キ者ヲモ放タズ徒(いたず)ラニ彼等ノ情慾ヲ充タシム可ケンヤ。我政府ハ公正ナリ。情実ヲ以テ之ヲ農商務省ニ転ズルガ如キハ或ハ虚説ニ過ギザル可シ。果シテ然ラバ余輩ノ怪訝(や)稍ヤ解クルヲ得ン。若シ然ラズンバ政府ノ策此点ニ出デンコトヲ熱望スルノミ[48]。

この社説が官吏侮辱罪に問われることになった理由について，先に引いた大岡育造の回顧談は筆名を「黒田清盛」にしていたためとしているが，これは明確に記憶違いである[49]。この社説が掲載されたときの署名は「社末　黒岩大」である。「社末」は，編輯局員になったばかりの涙香が彼一流のセンスで付した号であろう。むろん「社の末端」という含意である。筆名は「黒田清盛」ではないのはもちろん，本文中にも「黒田清盛」はまったく登場していない。

では，いかなる理由で官吏侮辱罪に問われたのか。『東京輿論新誌』第71号（1883年３月25日発行）などの「雑報」欄に掲載された記事を追ってみよう。涙香と坂本の二人は，３月10日，東京軽罪裁判所で「官吏ノ職務ニ対シ侮辱シタルモノト為ス可カラズハ論ヲ俟(ま)タザル也」として，いったんは無罪となったが，検察側が大審院に上告し（当時は２審制），涙香は欠席裁判のまま，重禁錮16日の有罪判決を受けたのである。

『東京輿論新誌』第71号には，東京軽罪裁判所の検事野崎啓蔵による上告趣旨書の写とこれに対する涙香側の答弁書が掲載されており，裁判の争点が分かる。

検察側が官吏侮辱罪に当たるとしているのは，まず先に引いた書き出しの部分。「怪物」の言葉が問題らしい。このほか「北地人民ガ開拓使官吏ヲ視ルコト蛇蝎ヲ視ル如ク」といったかたちで2回使われている「蛇蝎」の表現を取り上げている。一審の裁判官もこうした表現に「軽侮」を認めたではないか。それにもかかわらず，職務にかかわらないとして官吏侮辱罪を否定したことは不当だというのだ。さらに，無罪判決が理由の一つにした，開拓使はすでに廃止され被害者たるべき官吏もいないとした点についても反論している。

これに対して涙香側の答弁は，一審の裁判官はその職権内において証拠不十分との判断したのだから，それを覆すのはおかしいという主張を展開している。再審制を否定することになるこの主張自体はあまり説得力がないが，興味深いのは，一審で主張し，否定された「筆者は黒岩大ではない」という主張を繰り返し，もし大審院が上告を受理するとしたら，この点についての一審の認定を破棄してほしいとしていることだ。

問題の社説が出た直後の２月９日，涙香と坂本は東京軽罪裁判所検事局から呼び出しを受け，この社説の掲載経過を尋問されている。この件は２月11日発行の『東京輿論新誌』第65号の「雑報」欄に出ている。そして，同じ欄には，次のような正誤記事が載った。

○正誤　本誌第六十三号社説内に掲載せし開拓使官吏の処分を論ずと題する一篇に社末黒岩大とあるのは芝臺黒天の誤りなり。

自社の編輯局員が署名入りで書いた社説の筆者名をわざわざ訳の分からない匿名にするというのだから，まことに不思議な訂正である。だが，検事局から呼び出しを受けた事実と重ねると理解できる。『東京輿論新誌』は創刊以来，すでに筆禍事件を経験している。坂本清操が「仮編輯長」という肩書きであるのも，編輯長が有罪判決を受けていたためである。こうした経験を踏まえ，検事局の呼び出しを受けて，急遽こうした訂正を行ったのだろう。筆者を匿名にし，編輯局の責任を逃れようとしたのだから，ある意味で姑息な手段である。それは無罪判決を出した一審でも通用しなかったほど稚拙な対応だったと言えるかもしれない（むろん，当時の厳しい言論状況を考えたとき，私たちはこれを笑うことはできない）。

有罪判決を受けた涙香だったが，住所不明ということで，刑の執行は免れていたという。有罪判決がいつ出されたのか不明だが，「住所不明」というのはいささか不思議である。というのは，この時期，「黒岩大」は文筆でも演説でも活発に活動しているからだ。演説会については先にふれた。以下，文筆活動を見てみよう。

処女出版した『雄弁美辞法』はよく売れたらしい[50]。1883年７月には日本橋の丸家善七（丸善）から日置益と一緒に『議事演説討論 傍聴筆記新法』を出版している。「訳補」となっているが，特定の原本はないようで，当時アメリカで流行していたリンズレー式速記法をもとに日本語の速記法を考案したものである。

『東京輿論新誌』にも81号（1883年６月３日発行）に「茨城紀行」を発表したほか，この年は７月から10月に発行された89号，90号，92号，95号，100号に「地方自治ノ制ハ国会開設ヨリ先ニセサル可カラス」を５回連載している（１回目だけ無署名）。12月23日発行の110号にも「茨城再遊記」が載った。５回連載した論文は，「地方自治」という当時としては目新しい言葉を使って，その重要性を説いた卓論である。

文筆に自己の才能を開花させた涙香の前に「新聞」という道が見えてきたのは，このころだろう。後年，涙香は次のように回想している。

元来私は土佐の生れで，御承知の通り政治界では喧しい国であります。それで私も自由党の人々には色々縁故もあり，又大に引立てを受けました。併し其頃私は自由党の人々の仲間では，弱年でありましたから，とても競争の烈しい当時の政治界では，頭のあがる見込みはないと覚りました。志を当世に得ざれば，退いて辞を修め，道を明かにすと云うような心底で，自身も初めから学問の方へ入るのが性質に適っているように思っておりましたから，自由党，改進党，或は其頃嚶鳴社などの連中から種々誘引を受けましたが，何れにも加わらず一番他の方面に於て学者になろうと云う目的で居ったのであります。左様している中にも，私は新聞事業に少なからぬ趣味を持って来ましたから，遂に新聞に入ることになったのであります[51]。（傍点，引用者）

『東京輿論新誌』で盛んに「政治」を論じ，しばしば演説会にも登場していた「黒岩大」だった。だが，涙香はそのまま政界に入る道は選ばなかったのである。『東京輿論新誌』の主宰者，大岡育造をはじめ，先に名前の出た島田三郎，肥塚龍はみな後に衆議院議員になっている。

涙香は大変な「負けず嫌い」だったという。『萬朝報』の社員たちに常々「何事を為すにも第一番になれ。第一番になれぬとも第二番に落ちてはならぬ」と語っていたという[52]。引用した文章の傍点を付した部分は涙香のホンネだったと見ていいだろう。

こうして涙香は新聞人の道を選んでいく。しかし，新聞人涙香のスタートに筆を進める前に筆禍事件のその後を述べておかなくてはならない。

重禁錮とはいえ16日の短期の刑である。検察当局は本気で涙香の所在を探さなかったのだろう。大審院の判決は差し戻しで，事件は横浜軽罪裁判所で改めて審理され，有罪判決が出たらしい。どうして東京軽罪裁判所でなく，横浜だったのか分からないが，欠席裁判での有罪判決が執行され，涙香が横浜・戸部にあった刑務所に収監されるのは，1883年も押し詰まったころだったと思われる。刑務所では短い期間だったが，道路工事に使役されるなど厳しい体験をしたという[53]。

これ以前，1882年11月，涙香は漆間真学らとともに東洋出版会社を設立し，『同盟改進新聞』を創刊している。新聞人涙香の人生はここから始まった。しかし，順風満帆とまでは言えないとしても文筆家・翻訳家として順調に地歩を固めつつあった涙香の人生はこのあたりから暗転して行く。

『同盟改進新聞』は売れ行き不振でわずか45号で廃刊となる。この後，『日本たいむす』『今日新聞』『絵入自由新聞』で論説を執筆するが，経済的にはかなり困窮していたという。脚気で数カ月の療養生活を余儀なくされたのもこの時期だった[54]。頼りの姉為子や養父直方は，生業に就こうとしない涙香に腹を立て，金銭的な補助を打ち切っていた[55]。

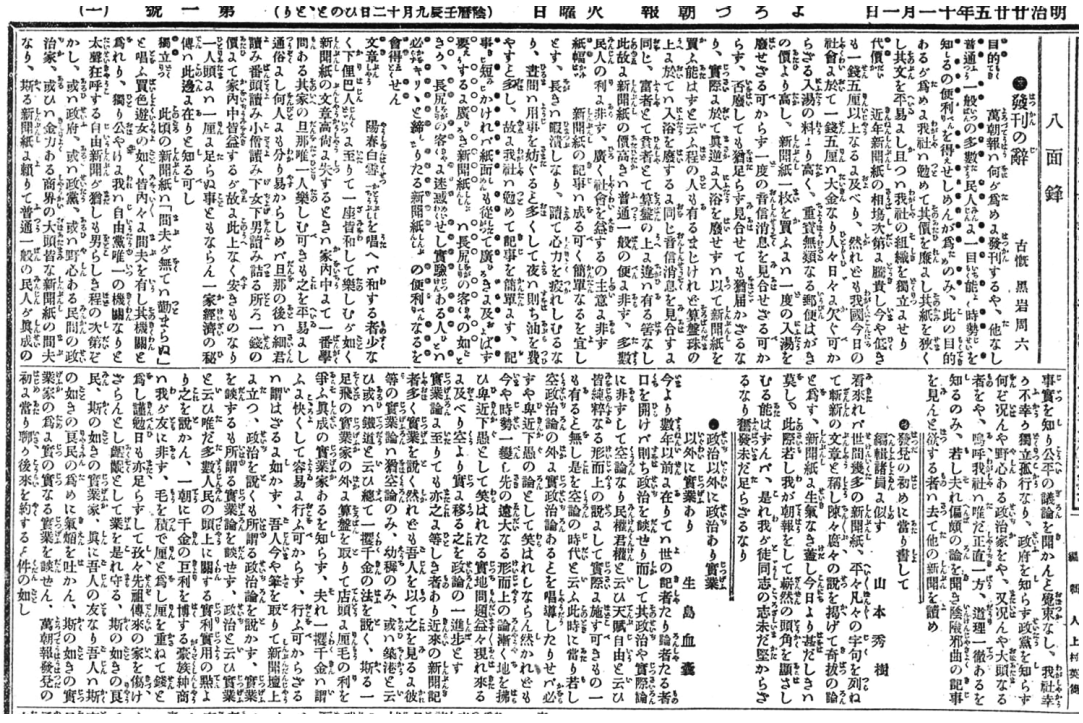
1887年10月，『今日新聞』に連載した「法廷の美人」（ヒュー・コンウェイ“Dark Days”の翻訳）[56]が評判になったのをきっかけにして翻訳・翻案小説の書き手として「売れる作家」になるのはもうしばらく先の話である。

そして，涙香の名前を不朽にしたに違いない『萬朝報』創刊は1892年11月１日。まだ数年のときがあった。『萬朝報』は，涙香の手になる「発刊の辞」の冒頭で，次のように宣言した。

> 目的　萬朝報は何が為に発刊するや，他なし普通一般の多数民人に一目能（よく）時勢を知るの便利を得せしめん為のみ。

「普通一般の多数民人」とは，つまりは「大衆読者」である。涙香は新聞が大衆読者に向けた「商品」であることを初めて自覚的に意識し，そのことをまさに大衆読者に向けて言明した新聞人だった。だが，新聞人涙香は生まれるべくして生まれたわけではなかった。

先祖は長宗我部氏に最後まで抵抗した忠節の武人だった。身近には幕末・維新の激動期を生きた養父にして叔父がロール・モデルとして存在した。「誇り高き郷士」の家に生まれ，あふれるばかりの自尊心を抱いて，明治の東京に出た青年は，「黒岩大」と名乗った。だが，若き論説記者はデ



『萬朝報』創刊号「発刊の辞」

ビュー間もなく筆禍に遭遇し，短期間とはいえ刑務所での厳しい労働も余儀なくされた。そして，困窮生活と病気療養が続いた。そうした経験の中で，我一人高しとして尊大にも「大」を名乗っていた青年の中に回心が生まれた。それは「高知県士族」も「大」も捨てることから始まっただろう。

1887年12月24日の『絵入自由新聞』に私たちは次の広告を見いだすことができる。

広告す　私事是まで大と申す名前を用ひ居候所此度都合に依り幼名周六に復し候

札幌県平民[57]　右の黒岩周六

---

[1] もっとも浩瀚なものとしては，伊藤秀雄『黒岩涙香――探偵小説の元祖』（三一書房，1988年）がある。また鶴見俊輔「黒岩涙香」（初出は『二十世紀を動かした人びと　第八巻　大衆芸術家の肖像』講談社，1963年。以下，本論文で参照するのは，『限界芸術』講談社学術文庫，1976年，所収）がユニークな視点からの評伝として知られる。なお，涙香の本名は周六で，涙香以外にも多くの筆名・号を用いた。涙香は後年，主に翻訳や翻案小説を書く際に使用した筆名だが，本稿では特に必要がある以外は涙香を使う。

[2] 土屋礼子編著『近代日本メディア人物誌――創始者・経営者編』（ミネルヴァ書房，2009年）。取り上げた人物について冒頭で短く紹介することになっていた。

[3] 趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編『講座　東アジアの知識人　第２巻　近代国家の形成　日清戦争～韓国併合・辛亥革命』（有志舎，2013年）所収。原田論文は同書246～262頁。

[4]『スキャンダルの明治――国民国家を創るためのレッスン』（ちくま新書，1997年）。

[5] 近年のものとして，「『スキャンダル』を売る新聞――再考『萬朝報』の相馬事件報道」『メディア史研究』第31号（メディア史研究会編，2012年）がある。

[6] 本稿は，文字通り「小伝」に過ぎなかった前掲『近代日本メディア人物誌――創始者・経営者編』所収の拙稿の主として前半部分を，涙香の包括的評伝執筆に向けて全面的に書き直したものである。

[7] 以下，土佐藩の郷士については，平尾道雄『土佐藩』（吉川弘文館，1965年）41～8頁，荻慎一郎ほか『高知県の歴史』（山川出版社，2001年）189～190 頁参照。

[8] 黒岩涙香の死後，彼の遺徳を慕う人々によって「涙香会」が組織された。『黒岩涙香』は，その涙香会が涙香の3周忌を機に編纂した。「先生自ら語る」「諸名士の談話」「先生と余技」「会員の見たる先生」「黒岩涙香先生略年譜」で構成されており，「黒岩涙香伝」の基本文献の一つである。前田耕作の文章は同書913～924頁。以下に記す涙香の出自については，前掲，伊藤秀雄『黒岩涙香』をはじめ各種の涙香の伝記に記されている。出典はすべてこの前田の文章である。なお，伊藤は，この出典を明記しているが，前掲，鶴見俊輔「黒岩涙香」はまったく参照文献を示さないまま，前田の著作にしたがって記述しており，著述家の倫理として問題を感じる。

[9] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』916頁。引用に際して旧漢字は常用漢字に，旧カナ遣いは現代カナ遣いに改め，適宜句読点を補った（以下，引用に際して同様）。

[10]『東京朝日新聞』1902年４月15日などには「内科外科診察　黒岩徳明」の広告が掲載されている。

[11]『日本外科学会誌』1908年７月号に，黒岩徳明「射創性動脈瘤について」が掲載されている。

[12] 母信子は，涙香には叔父にあたる尚輔の次女である。つまり，涙香の両親はいとこ婚だった。ちなみに，信子の兄慶介は江戸に出て浅田飴で有名な浅田宗伯の弟子となり，静山と号する医者になった。

[13] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』918頁。

[14] 前掲，伊藤秀雄『黒岩涙香』21～22頁。出典は，鈴木たま（珠）述・鈴木勉記「黒岩涙香外伝」（『別冊・幻影城　黒岩涙香』1972年）。なお，証言者の鈴木たまについて，伊藤は本文に記したように「涙香の姪といわれる」という曖昧な説明をしているが，彼女はたしかに涙香にかかわる「謎の女性」と言えないこともない。戸籍的には涙香の最初の妻真砂子の母鈴木ますの兄鈴木亀吉の庶子（母不詳）ということになっている。「涙香の姪」はここに由来するわけだが，浩瀚な涙香伝をものした伊藤が「……といわれる」と口ごもっている理由は，「不詳」とされる母を鈴木ますとする推測が有力だからだろう。鈴木ますと涙香との関係は明らかではないが，異色の評伝『探偵実話　黒岩涙香』（リブロポート，1992年）を書いたいいだももは，たまを涙香とますの間に生まれた子どもとの推理を述べている（同書343～4頁）。

[15] 涙香の長姉為子（次姉雅子は夭折）は，藩主山内容堂の典医秦呑舟に嫁いだ。為子は早くからキリスト教に入信し，その影響で夫の呑舟もキリスト教徒になる。呑舟は明治期になって東京・銀座で医院を開業し，後に千葉県大貫村（現・南房総市）に移る。為子と呑舟はキリスト教の布教に努めるとともに医療に乏しかった地域医療に尽力した。

[16] 岡直樹『偉人涙香――黒岩涙香とゆかりの人びと』（土佐文化資料調査研究会，1970年）11～12頁。

[17] 前掲書における岡の探索によると，黒岩越前の直系はむしろ黒岩藤之進の家だったようだ。前掲書107頁以降に「黒岩藤之進（直方養父）家系届書」（出典は不明）が収録されていて，「元祖　黒岩越前」の後，「二代　掃部之亮直成　右越前の長男」とある。その意味では，直方の養子となった涙香は「黒岩越前の直系」としての意識を持つことになったわけである。涙香のその後の行き方に大きな影響を与えた養父直方の生涯にも「黒岩越前の直系」としての意識が濃厚に漂っていることは後の本文でふれる。なお，文政年間（1818年～1830年）の安芸郡内の「郷士名籍録」には17人の郷士が名前を連ねていて，黒岩藤之進

はその筆頭に登場する。石高は17石740合（安芸市史編纂委員会編『安芸市史　概説編』安芸市，1976年）85〜86頁。黒岩市郎やその父の源助の名前は，ここにはない。

[18] 前掲，岡『偉人涙香』12頁。

[19] 黒岩市郎の履歴について各種文献は，やはり前掲，涙香会編『黒岩涙香』所収の前田耕作の稿によっている（同書919頁）。「大蔵省に出仕」という点に関しては，国立公文書館所蔵の明治初期の「官員録」類を精査したが，黒岩市郎の名前を見出していない。

[20] 以下，黒岩直方に関しては，本文でもふれた『維新土佐勤王史』（瑞山会編，冨山房，1912年）を適録している前掲，岡『偉人涙香』による（同書115〜132頁）。

[21] 前掲，伊藤『黒岩涙香』23頁。

[22] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』920〜21頁。

[23] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』921頁。

[24] この塾についても森沢沮なる人物についても手掛かりはない。平尾道雄『土佐藩』（吉川弘文館，1965年）が幕末から明治初期にあった土佐藩内の私塾一覧を載せている（90頁）。そこには19の私塾が主宰者名とともに掲載されているが，森沢沮や森沢塾はない。

[25] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』922〜23頁に全文が収録されている。

[26]「所適」については，山本秀樹が「ムネユキ」とルビをふって，涙香の「諱（いみな）」としている（前掲，涙香会編『黒岩涙香』764頁）が，これ以外に「所適」を目にしていない。

[27] 前掲，鶴見『限界芸術』91頁。

[28] この事件に関しては，福地惇「立志社の挙兵計画について」（『日本歴史』吉川弘文館　1992年2月号），大島太郎「立志社・陸奥宗光ら陰謀事件――壮大な夢と現実」『日本政治裁判史録　明治・前』（第一法規，1968年）参照。立志社関係者以外に，元老院議官だった陸奥宗光も逮捕された。

[29]「専門学校」と称していたが，1903年の専門学校令による専門学校（旧制専門学校）とは違って，特に入学資格があったわけではない。旧制専門学校は旧制中学を終えた学生を対象にした高等教育機関。

[30] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』522頁。なお「黒岩大」の「大」は一時期，涙香が筆名にしていたものだが，この時期はまだ使っていない可能性が強い。團琢磨が「黒岩大」としているのは，記憶違いというよりも，「黒岩大」として登場した時期のことが刷り込まれていたためだろう。

[31] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』870頁。都筑孝介は「余は先生に近侍した七年間」と記しており，記述内容から主として実業面で涙香に関係した人物のようだ。

[32] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』870頁。

[33] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』766〜67頁。

[34] コレラについては，見市雅俊『コレラの世界史』（晶文社，1994年），同『青い恐怖　白い街――コレラ流行と近代ヨーロッパ』，山本俊一『日本コレラ史』（東京大学出版会，1982年）参照。明治期のコレラについての研究も少なくない。拙稿「コレラと民衆」（『文明開化と民衆――近代日本精神史断章』新評論，1993年，所収）は，この時期のコレラ流行について民衆精神史の視点から分析したものである。

[35] 前掲，伊藤『黒岩涙香』35頁。出典は，1926年11月の『探偵趣味』に掲載された田中早苗の文章。田中は海外の探偵小説の翻訳を多くした翻訳家。

[36] 涙香が上京して間もない1879年８月19日の『読売新聞』に，成立学舎が正則科生徒に欠員があるので補欠として60人の入学を許可するという広告が掲載されている。涙香はこれに応募して入学した可能性が高い。なお，この場合の「正則科」は「漢文」ということではなく，補習科に対するものだろう。

[37] 福澤研究センター編『慶應義塾入社帳　第二巻』（慶應義塾，1986年）406頁。

[38] 漆間真学「侠気と熱心とで一貫」（前掲，涙香会編『黒岩涙香』486〜7頁）。

[39] 当時の東京でいかに演説会が盛んであったかについては，稲田雅洋『自由民権の文化史――新しい政治

文化の誕生』（筑摩書房，2000年）が詳細なデータを作成している（同書318～9頁）。1881年７月31日から10月10日まで期間，『報知』『毎日』『朝野』『東京日日』の各新聞に掲載された主要な演説会の予告をまとめたもので，この短い間になんと38もの演説会が開かれている。２日に１回以上の頻度である。浅草井生村楼，柳橋万八楼，明治会堂などが会場になっている。

[40] 嚶鳴社討論会は，前掲，稲田『自由民権の文化史』所載の期間中には，柳橋万八楼で２回開かれている。

[41] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』585頁。

[42] 前掲，伊藤『黒岩涙香』39～40頁による。

[43] 前掲，稲田『自由民権の文化史』280頁。稲田は黒岩が訳語に苦労した状況やおそらく原書にはなかった点を書き加えていることも指摘している。後者では，例えば，外国の言葉を訳すときには，まずそれが旧来の言葉にないかどうかを吟味して，やむを得ず新語を作るときは，あくまでも漢字を採用すべきであると，「漢字」の大切さを説いているという。『雄弁美辞法』は国立国会図書館近代デジタルライブラリーで読むことができる。私は訳語にいろいろ苦労している点はたしかにうかがえるものの，全体として読みやすい日本語になっている感じがした。涙香の翻訳家としての力量は，この処女作でも発揮されている。

[44]『明治文学全集　47　黒岩涙香集』（筑摩書房，1971年）所収。前掲，涙香会編『黒岩涙香』所収の「略年譜」をベースにしたものだが，独自の研究・調査によって大幅に内容が拡充している。

[45] 高松敏男「若き黒岩涙香（周六）の出発――『東京輿論新誌』時代をめぐって」『大阪府立図書館紀要　第八号』（大阪府立図書館，1972年）62頁。

[46]「美輪壮夫」以外には，「杉崎玉山」がたびたび登場している。なかなかに筆が立つ。しかし，この人物は杉山藤太郎で，涙香と同じように編輯局に採用されたことが「雑報」に掲載されているので「候補」からは外れる。

[47]「美輪壮夫」の投書のテーマは，まさしく「政治」であり，「政治家」である。「政党ノ樹立」「雷同民権家果シテ悪ム可カ」「立法者ノ注意」「政治家ハ定見ヲ要ス」といったタイトルがそれを示している。自由民権を推進する立場からの論説であることは明らかだが，68号に掲載された「改進保守ノ別ヲ論ズ」を読むと，改進保守双方とも「幸福」を目的にしているのだが，改進主義は「将来の幸福」，保守主義は「現在の幸福」をそれぞれ目的としてところに違いがあると指摘して，急進的な主張はしていない。文章は平易で分かりやすい。

[48] この社説は，前掲『明治文学全集47　黒岩涙香』に収録されている（349～351頁）。

[49] 前掲，涙香会編『黒岩涙香』585～86頁。この回顧談のタイトルが「黒田清盛で筆禍」となっている。弁護士でもあった大岡はこの事件で涙香の弁護に当たっているのに，この記憶違いはどうしたことだろうか。「黒田清盛」はむろん黒田清隆をもじったもので，黒田清隆の強引さを平清盛に重ねた皮肉である。当時，涙香が『東京輿論新誌』編輯局内でこういう言い方をしていたことが大岡の記憶に強く残っていたのかもしれない。

[50] 大岡の回顧談に「輿論社から君が米人カツケン・ボスの美辞学を翻訳したのを出版して，是には堀口昇氏の序文などがあって頗る売行いた。君は文章に於ても亦当時から非凡の手腕があったことを認められていた」とある（前掲，涙香会編『黒岩涙香』586頁）。なお，「堀口昇氏の序文」は大岡の記憶違いで，序文は末広重恭，堀口は校閲として名前が出ている。

[51]「余が新聞に志した動機」（前掲，涙香会編『黒岩涙香』9頁。

[52] 三宅碩夫「二番に落ちるな」（前掲，涙香会編『黒岩涙香』500頁。

[53] この時期から18892年の『萬朝報』創刊に至る涙香については，曾我部一紅「黒岩先生と余」（前掲，涙香会編『黒岩涙香』771～796頁）がくわしい。曾我部は，涙香が新聞人としてのスタートを切った『同盟改進新聞』以来の親しい友人。

[54] 漆間真学が，「零落を極めて浅草千束村の下宿屋」にいた当時，「君は脚気病に罹り銀座二丁目の秦氏宅

に釣台に載せて担ぎ込んだ」と回想している（前掲，涙香会編『黒岩涙香』491頁）

[55] 前掲，漆間真学「侠気と熱心とで一貫」（涙香会編『黒岩涙香』）には，涙香の学生時代の話として直方らが涙香を官吏にしようとしたところ，涙香は「官吏は嫌いだと駄々を捏ね」て応じなかかったという。こうしたことがあって，「終いには金も出なくなり，全くの孤立状態になっていた」と漆間は書いている（487〜8頁）。

[56] このとき，初めて使った「涙香小史」の筆名が涙香を名乗った最初である。「涙香」の由来は香奩体（「香奩」は化粧道具を収める箱のことで，香奩体は女性の姿態や男女の恋愛感情を歌った艶麗な漢詩のスタイルのこと）に使われる「紅涙香」だったと，漆間真学が記している（前掲，涙香会編『黒岩涙香』781頁）

[57]「札幌県」を選んだ理由は，兄四方之進の関係と思われる。四方之進は東京の開成学校在学中の1876年，札幌農学校に入学し，クラークの教えを受けた。キリスト教徒として北海道新冠の御料牧場の牧場長を勤めた。農学校 2 期生の内村鑑三との交流も深く，内村の『萬朝報』入社にも関与したとされ，涙香の生涯に四方之進が与えた影響は少なくない。この点の解明は他日を期したい。なお，黒岩四方之進については，前提，岡『偉人涙香』（143〜154頁）参照。